国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫
番號 和 18282
冊數 35 (27)
函號 263 33

順文閣内
和書
類號 二八二
冊架 一一五
函 二三二

和書門
類號 二八二
函 二一八
冊架 二五

扶桑拾葉集卷第二十四

月録

勅撰三代実録自貞観元年記　菊原宣澄
詠月和歌序　同
道眼法師自歌合跋　同
細川右京大夫自歌合跋　同
中原遠忠自歌合跋　同
慰　春議基綱公妻餘裏和歌序　同

内閣文庫
昌平坂学問所
林氏藏書

きぬ川き日記

名香合記

伊勢紀行

春資直卿和歌序

同

同

同

同

拾葉集巻第二十四

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

初ふるさとに参句をまう記

藤原實澄

さゝ川内乃帝は御ものゝ乃御代は
遠歌ゆゑ〳〵さりて数句い月相は御ゆ〳〵さり
ゆ〳〵ゝ比之は覧ゆゑ記り當代乃れほと
事なりしふ数句をまうくい當代ゆ
句しさ歌乃ゆゑて
ゆゑ伊をゆて
あ宮乃山ゆ

月の宮たちまちに乃ぞのたまし
ひいふ歌をもてなりて江説をもて和りよ
し源り作りきしかハ時ふ人めつらしと
宮さらりけり此事ふ天暦の御乃御ら
らりてもに海さしく橋ヶ山邊ハ此御の御
ふ歌ハ中れやあるんとやもち元人ハ見
ふ所りあるされ元亀乃百源よハ物
ふれ色しおかりもて青雲ハ宸乃蔵ら
入ふらひふらめまハ傳所乃ま奥ハ舟
楫輔作の名を知りて亜山乃秋女乃雲
毎妖艶乃恨ふられふ事めりとらら有

家ん今ハ此法師乃歌詞と同えいりを
ヒ敵意とおもふらしんと、ふ〳〵と通
源りたる事ハよりて年ふ乃義者とい
ふ事をもて吟ふ〳〵さと乃藏ハ文やと
まてあやしく覚しく給りしハ物ふ
源り文つるれハ此ハ物ふ
しふハ事ふ記しとふら
ハ乃函こふ乃感ハ乃事
乃物ふ乃ふりて九月十日
御りやハりさハりと同さ
十三日ふ乃家ん乃ふ時ふ宿ふ

乃月はなを宮ゝのかたはらに
ぬ。さはぬ宮はらとさはぬ一ぱは老人の
ゝしく行ゝ始つゝ春もたゝ友ゝ
きゝし郷ゝ行ゝいかゝ乃事と思ひ
出ゝ相ゆつゝ思ひさゝ戸
うゝくゝの法師乃春の
ゝふゝとゝ世やいく代秋乃月
脇をすゝ乃ら御製
庵ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

ゝ乃山ゝ乃紅葉御堂乃橋ゝ
ゝ戸はゝ
乃戸はゝ
ゝ
昨日
巻乃
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

宿かりくもかすかにけるをとよのくに阪酔
とうとうしくまちいれたるうく面飯
の月とかんくにのあれてすいてはたえ
を踏中華閣うつ波里ハ宮漏や
をすくす鐘の影ハ東西をうつ家里ハ
年の良辰賞仙樂半ハ成て相あそ
ぶ

詠月和歌序

同

やまとうたうつ月をとくあうとをあつ
はるかなるとをくあつんこあるの中ハ秋ハ
月の中ハ八月をいはんとすれ共ハ
はるかにらんをあをうをとをくハ雲間をとれ秋ハ
あむいかりしかハ今ハいさまちうとうあり
うの明和の法時をうとうをあ共ハ今時
ハ行ハ秋ハ月をあ一ハ春ハ花ハ
ハ根のるうれ和と形しいはるし十ハ月ハ
年ハ月ハ成ハ今青ハ信ハ共ハ月ハ日ハ
住居とうとうハ感慨の思ハ和ハ人ハ
海ハ月ハ竹ハ雲ハ月ハ為ハ人ハ
年ハ光倫ハ月ハ月ハ

十五首の和哥とはまたいにしへより歳々にや
よみ人あまたありしをとゞめて吟し雅清の
ありしとおりおほくのせたりともあるとも
時ありわくなる人とのへいはしめのゆゑにや
をはるのことわりといひてとあり

露わけし色にかゝおほねくみえしすゝき萩原
月もや夜の錦なる海

人々みな志川まで歌よまれ月ながれ
風すゞし秋の夜ぞこと〻の郷
こゝろし次鳴秋のうへの色ともなく色
あ萩もとめて月ぞありける

浦さひしき数のことのはまた次第に
すゝしき扇の月ありさしもその
月影のうつる袖かなしきに露ぞ
海山しくも色まさる秋かぜや河
ぬもまさるの草の中にも露みだるゝ
家をおもふる庭の月いつも宿
いつまでも月の色みえ月にいざなん
蓬生の宿はあれる秋さ
こゝろあるさへ名を照す月はいさん
身の雲のあとをまちの世に
秋の月あまねく中をいる夜

名をしけるは世のうきふしなく
なにはの事もあらましをなかなるよ
なき跡の月は遠くなりぬるかな
よは物思ひ袖もなみだの雫かな
見しよはりの月の影をそへては
山のはをいでゝやうき人恋しさは
なをしのぶらむ月のかけのうちは
いたくみちかきは弟子の契りかな
もとてらす月のかけのなみた哉
おもひかねつゝ宮つくも山のはの
なにやたる色せぬ秋の夜の月

月はしもいはねとよそにあかしもかな
くらきよりくらき道にそ入ぬへき佛
道堅法師月歌合　同
撰此一帖ハ道堅法師独吟の五十首歌
なれはもとより独吟義法の内
よみへきよし命せられけれは
一首の勝負を定むる事
ひとへに判者もなき心の内の
ゆゑよしもうけたまはりて
灌川の哥合とて五條三条の判者

と始めて何の文河の波立ちさ中
河の長代流れを乃とまりて世代もくれぬ
とうたうらるる是皆四位上人代歌者依浄
代はるかの胸中にみたれて移れ
おの乃えおく流れ乃ながれ乃ながれ乃
波間所も信ともうて幸とてこれ乃
つ乃天雅と三昧とうて新しう書よ者
聖代流と乃世といへ代新波はりし
られ乃流れたれて榊ゆ山の餘情
を樹下乃上代辞宮を流れ乃へ乃世乃ま
上人成色〳〵を詠幸乃とれて波さ

さ判者とうたうよれるまや
いとゆう思代頃紫の家よれを當河
英少代家乃来うん代行をみ者家代
乃もて遠とたうへ乃流れ色し
うを流さくとれ乃乃ながれ乃
乃に一〳〵とうたうし法さんい行事代
うをうをうをうを丹を亜代ゆいな
也河色毘盧代心ちを代下乃一会と越う
をうをうを色乃へ乃や御ん中〳〵いな
会中さんい事代流れうを乃ゆ色
を色乃うをうを流れを色乃を

又ハ人数の後詰とあるハ、
ゆゑなれの雄雄と掘せいこそあるゝ忽然金起
の一句と連句ハ、ゆゑなるをいとれ
色々ハ、ハ、ハ、ゆゑなるを色々
と共一枚徽笑の義なり撰して一年慶
賀の句とくゝるゆゑ也時ハ明應六年
年ハ、ゆゑなるを代ゆゑ先八日ゆゑ
ゆゑなるを

細川右京大夫自歌合後

同

祈寿合と云事ハ、仁和天徳ゆゑなるを

ゆゑハ今の世ゆゑなるを遠ハ、ハ、ゆゑなる
ゆゑなるゆゑ、ゆゑなれ数ゆゑき中ゆゑ、儒の
ゆゑなるゆゑハ、ゆゑなるゆゑ、国住ゆゑ
ゆゑなるゆゑ御蔵濯ゆゑ天河の歌合ゆゑ先代
中色々ゆゑ、又判者色々ゆゑ
事ハ、ゆゑ作の代と色々ゆゑ
句ゆゑなるゆゑ、ゆゑなるの通の
ゆゑ掘ゆゑ世ゆゑ人際三界の古今
代二の歌合ゆゑ世ゆゑ
ゆゑなるゆゑ色々ゆゑ
又ハ代判の詞ゆゑ

れかなりてやはりとつい立つるれば所右
の方十七字のとあはせて五つ為つかうまと
いなあるいはとりて人のん間ちるれくと
れいちまれりのりねをくれ桜こついん前
まつるこのむ百ちくうりとこともの
こちの他院よりてるるのりたいてるれわるま
ちんれりもいちまいつまれをりとうまと
あるとも十日のうちの京一字の褒賜よりなる
きぬのりとやあるつて一枚の書状とと
ちくく技所法師一をと送りれいく料
の紙くりまくきうれ作つるれ義の兵

りれちりさ海いあれ人のうれ衣り
もをうるしりうれちりもり送れ
うんをさ法うあくれるりとをふとひ
ちうこんれるり。稀いるくよ必ゑくう。
むうあをれりをんるうを武ねの
家とうをく政とうをを氏とくてん。
ちれくれうこうしうれいう海う
るうさとう肥ちるり鎌うして世中れ
ぬれうをくよりるりとうるうる。
うれいうれれりとうくて。棒う
むうくくよりうをのうを徒しをあ。

ぬるうつれば通よりそのあたりへくるま
よせ後ろの方に武家衆と新潟津のあそび
ものとうちまじりぬるうちに日はよろこび
てたちのくれば武家衆はうちつれまん帳幄
の中より是れもうちまじりこれは武家とあそ
ぶものとうちまじりまわりやこれ勝手と笑まん
とんでもの此うちにそのうへをあらそれ
いよいよ業とあそび家とうたいかたり
いろ取のいろもつくるくるくるくるくる
けいりうとうとうとうとうとうとうとうとう
きたがるあのうちうれかはるとも書付

かはりうとうとう野辺
の花のうちうとうとうとうとうとうとう
ものうちうとうとうとうとうとうとう
ものうちうとうとうとうとうとうとう
ものうちうとうとうとうとうとうとう
中原遠忠自筆合歌

同

抑此歌合の発端は中原遠忠といふやまと人
歌道に奇妙詠吟とうたせとやれとわさと
して神仏はこととしよせ月雪は思ふ遠方遠次
とうとうとうとうとうとうとうとうとう顔沛ふ家といとうとう

なをいとゝ[illegible]集めて[illegible]不淚乃玉簾乃数に
[illegible]枝の下葉に数失なんことをいとゝ
[illegible]とゝ[illegible]
[illegible]百番とをり彼[illegible]
しうに御叢灌宮川の[illegible]流とをもに[illegible]
くて判の詞加へさせ[illegible]此老法師よを求むに
百代[illegible]の沈義者よ撰を用ひることは
[illegible]
賞とゝ[illegible]
を[illegible]
と[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]八十代老の末葉よ朝の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

色之輪のかをり物うらゝ
かなる中に彼と物しらぬ
代せ先のうらに所うつ
くさ〻り勝なりと云句つき侍るものさ
代あのうつくしいさんたちの思ふ綿延
と難へ忘れを事ちがひとわさはひて
ゝゝよ老のゝ海ゝ忘れまとゝ云句
るよ程さ何なるゝ。いまん後ゝ人ゝ
みもいゝと秋のゝ道のゝゝ思ふ
るゝゝゝ後ゝゝと。雅俗の
俗のゝとゝもゝゝゝ事ゝ侍ゝ

ゝの池のゝいゝゝ侍ゝ箱の
色ゝ新し紅むゝゝ宮殿ゝ
紅ゝんやいゝゝ花ゝ物の
花ゝゝゝゝ色ゝ

魅参儀基綱公共妻餘良和歌序　同

香山居士代柳樹と敬門。基ゝ侍ゝ
れゝ世代ゝ。宮堂先生の朝
雲といゝ。秋の後孫ゝ
和一曲代感。絶ゝ牧童ゝ
代琴演ゝ代ゝ

所さしてや。凡万葉の古風なる事
なれば常のうつくしき事
なれども久しく人丸
さきはとやすむいにしへ
といふ歌とをもつて人丸
し。今相互の中絶をなげく。歌
はなりしといふ事
あるべきやうに奥ぶかくなるとも
いとをかしかるべきなりけり
又ことやまの歌
なるはたちかへる
なりけり行末こそ
万葉

多くよむ人まれなりとなげかれ
山はなくさびたる事のみなん
歌とかくなるべきなりける
なれば作りとおもふ
思ひそめ逢そめ世のやまと
とかしかの物いはぬ
人とかのれる物よりこそに
作者をつくるべ
いふ物ひとをもつて
うたをつくるのあるとこれ世の
人のなかにはかりなん

おもしろきことゝもなるをやいはまし
かくよむる今の人あるを源氏の
うたのいてくるもおもひ給へんや
けふもしくさも日かとかうる月菜れ
ゆかしうて給へいかゝわか給へ

紫式部日記跋

同

此一巻は紫式部かみつからかきたるにてしるし
くして源氏上の物語とかうる。先例つま
しりかめて。本のしらの鏡なとてうつ源。
それらの源氏物語と紫式部か書にあらす。世俗寄学者記

物語と紫式部か書きしを。それ世にのむかしより今も
ていひそめし人のあはれもしらぬものの物に此
関史といひ実録といふか。日記なのるきと見えて
とゝめ文とも見えてそこはかとなしいひ出給へるにや。みな
あれを読みしれみてあり為ある事に。まさに侍て。
実にはらのうちに紀あるへし。紫式部この名を
さくらのをとりくての源氏よりは紀名也
いかにさるをとりて此国の物語なくそれる
なるに千七字をおもとして。百の万物の事
をとりしへしるか。紙よりにはつゝる学問
あれとそ読むさしもあらはれや。蝶綠

のかりそめとやとりつれば雨の渡れば渡りとそこなりつるかたくいるさこそにもんぜいまけはなきれ絵或色織
遠代人々の信代家々に作りくむひと
今の板実とはなし紙素の新絵とものみ
ちり長名ありそこなりはくるを西枝をくるる
やうしと絵をもの用はいかをもとこれをみる
此記録のかをもとこれをうこそいとあるの物
くりくりそれをよ絵をと文永代仏洞をて
宸筆の御像のあるをとと絵山代勝概稿
王代荘厳ちりくりく拾葉抄巻のあり

こ面紙百年余はいりまくく筆書
ようてをりてこれ実義はおさうれ
ちりくりそれはのくるよりこと隆新の大内会
ちりくりいとこのみくり指拍はや撰葉花
のはりしと枝はつをそりあまこと代舞
のりりをきりきりる無あるこれちりせりと
彼絵の何をそるおくく御りけ少年代
程をそれをよりくくれりくく美りく事の
今思あれ絵をりられしは一をもこれ
をを能生れををうれをれをるくく
りるあんりはくくこれをを御んをを

いかなるさはりの松ぞとあらくしく
ゝる山寺に見まうきさはりあらんと
をもふに云傳れる事
そもあるべきとの法はつよんつるゝ
ちとをうりんわ[illegible]
うん行ゝいうりいんやう傳奥抱合れ切法
圓浄寺一代記根うりとをも行ゝ潰候
の法縁起源の巨益として但以前若宮
に尊れ宿生れ[illegible]
し作れ裏れなる新[illegible]
すうせし[illegible]

てやうさされこゝれしの
れらゝもみえとゝ
うあと行程ら色れ奇
そこゝもれなりと
行ゝうと秀逸の
懐四れ上れ
ゝり涙りもを
ゝいゝ吉野の
行才ありゝ
れわゝれ
と色ろゝん

せをせまりてさとをかすうすうとなりよはふかく
ていはゆるくるるをとこをそはれ
れはかゆるはゆ今もくるをさはし
うしおれをはのかくにのせをあ来のせをみの
うをあるくやとをくをあるをりをん
わさをれ日記をりうやうれはれくを
はをれんをれやうをれて来れをたを
はをれあをたのをれをくむうをもを
ををれをりををりをれはいてをり
おれを奇ををはをれをくをくをや
をくををまをくをれやうををいるゆ

へのはをんをとをれはをりをれをりはを
をくをせをれをくをををりをりを
久安元上皇を百首歌奇ををををを
ををををををはをを彼為業集をり雄略天
皇歌をり歌をを歌ををををををを
をををををををり新後古今集後拾遺
院の遠懐歌を撰をををををををを
をををはををををををををををを
を書をををををををををををを
をををををををををををををを
をををををををををををををを

[illegible]

御製

[illegible]

ニ又しは雲なるもて月と西にかくれてあ
光於しらん
あくる後はいかにして此世なるものにゝて究
後にしれしありしにしれはるゝ内

名香合跋

同

蔚宗か傳はく王浩留か總とありしかとも
後らし此物らしらくてらしつゝ薫香あ成
秘せの一のことわさかしく実於此木後る
事なさしこてあり流る此一をなる秘
とらく物てさあ後しと後るゝ見此

於此甲乙有名後なる事なおわりての世
なくいかにこあてもしやあつしいは中將
見ちかはりてちの人於嘉此おもしり
あからありもとつり後さり此ならなは
しかあり後るといも異なる事ゆるとと
いとしも深しく事於一をと記しれ尺
るあり我とかしわ鼻孔の指南有據
後なし世尊仕こゝ席有此を後これとこう
分かれ花といはうめ有るしかり道を
しかとつ花の香此於色のもとおつく後
こそこのきく此わなおりこて於て守

他ちゝ寺番衆ハ三月朔日前
ゟ出ル筈ニ付ハ色〻指支申
乃文代ハ人ハ色〻ゟ早ク
始ヘ参じ代物ハ
ゟ給ゟ参ル色〻ハ判者代ハ
業ハ西ゟ乃業ハ代ハ先
ゟ人ハ役事ハ
西ゟハ色〻ハ
成ハ〻ハ役ハ尾ハ清ゟ道屋
役ハ乃ゟ

人住右紀行

同

四月乃ハ住右天ゟ小浦ゟ
ゟて十九日伏見へ着して船舟院ゟ
ゟ乃事ハ
お用ゟ清ゟ
道ゟ
不ハ
ゟハ
ゟて夕立一ゟして
ハい乃ゟ舟の
ゟ
ハ

ふるし小天昭寺しやいふかてとさ
りりとりしめ和くくりさきまろ奥
あ教事小ふひ四かくて始ましの月さ
しりろ寺ア人てし和をけろりりを経
をさうといふとしらよいろりて四ひてた
乃め紙まし人寺ろれ作りしふいとの
くしを出るくしてよりあるやろふ
ア人ちひといまてはくいとろ作よ
をめくあれうちは多しの也ろれ
ろてあつてめてこの西れ寺堂ふろ
和とろしゆせしろて出りこえめろ

すふ人を三ろ繁ちをよとろ法性巌寺
羅乃はまふ寺ふひ作ふくて和泉惣面庄
代光明院ろひくの興ふをとまろ光
原ろ紙和くはろ意しふ塔乃をのを
人くあまとせろくよ教とまろ法つ天寺
ろはてろしふ石乃香井乃ふよ
光明院乃法院寺あをひくしてお寺を
ろすふとちあひををのく金堂ろ
ろわろ法金剤を頂載しおふしく日
ふあとしを作くろ乃大経若経一巻
若殿ろ和寺代法花経ふ経見し

きら源起信修行ますとつふ誠実として
信義乃源をさとるあて法華経をたのみ奉
んけうらよりとひつてきを作り
ひとをせん菩薩ようやくの世界
ようふつてしたのしの象
諸堂也礼賛義して豊寿しくしくく
神足宿源清うしんかうしく菩提
寄信して四弟しくしくたのみ奉つて裏乃
ようしめてしし信きて浄土愛流罪く
ち換して四ようしの明ようきをおせ西山
を人不断念仏勤りありし西方なる和尚

と法華を感しを源成おし信りの義
井乃多成掛く
南無よきて世をふ義井せつや
法本しあつる方ひ成ん
一和尚道よおあひく文首平生納し
信事成ようしひされ信りかくておよ
ようをの乃信してけつさすめくく人
くをようらやをみくきをようを信者
社ようてようて浄祈ましを也十首歌
生納をめ西ようおうを祈るる小信ん
でけうよ浄おせ掛ようれ不よ和演

乃ましり道をしてあの海小松をしいのくあつて
まことに奥いとをいさやひろくん
和泉乃国よりゆりてゆりて道とそれ
名あれ所ともいひつくしへ名をあれ
ともの乃あり数松原しいふとしろとをて
てこれも世乃つねの松ハ乃ゆしを仏と
吹くしかるやうに小見を行きて
木くしに代表を海ら名をみる分
名よりつくあるきわくく
南方を乃院よりいくはまくいさうり

ちてかされ作り家庫より書つぎしかい
屋くく最ゆ事れ夕ハ今て又ハ岩家の
寺つをゆり作り作りあくれ日を光の流ち
家居をを拍子して舞をゆをくる
世二日言野より来給乃ゆをひをく京都と
いふ光武ををて寺のをて海りをち作り
されしを云ふり興りれをくしる程市人
をちちさをれ寺る成見て
いつをを新さけ市人をちさを
はをを小い家を有をり
大香乃社信田家ちを云ふををうち

すきていけくはけたるかゝ社のあれ給ふ
興うれたるとくるる所へ根本まつりのむしろを
て馬二疋ひろ給ふ人あゆまさしつゝき
そりて食籌場の物すゝもせそれ
りひりけをあんぬ物ゝ法寺の十編
院とゆい南村一山の寺沢頂寺けさこ
あるとすを塔ゆゝ明る灌頂をたとるひ
て法物けいすゝさそしゝ寺をゝ米五
実相院といふら物よゝ世をさゝれ
東四しるひとゝて根本よいたり
しゝ宿院十人あまりそちはるゝ

世ゝ入物ゝのうる嶽のやつをおひけ
ぬ事よ作をくさはゝ久代しゝて興
あゝ大門けゝちゆゝ入そゝ後ゝき
けゝをゝうゝ所よ作ゝあをゝて
をゝゝ法をゝ乱ゝ山中みる物の
ゝゝふてゝをゝゝさいゝくゝ明ゝ
寺傳法院ゝて物ひつけ作
言野山ゝれてゝをゝけゝ
法をつゝんゝれをめゝ
雅りゝふ動を縁見て
ゝれゝあゝゝゝをけてゝる深ゝ

血の涙をながしてうみ
覺鑁と人の涙弄ぶ美の中い美をう
も美をうれくさめるも美をうつ紙し
きといつる續後拾遺集へ入れやとひ
ものもて

いつさめんうつをもうつ七十の
なるふ物をすれ世の中
實相院といふ所つくらもれうち
やうとて居る程紅葉の葉をきて
あもて又いきておひうつ
物をうのひをうゆる

女こうる面をあるとて人をせりをいうれた
ちて粉川施善寺小ゆうて物をうつ
堂の方面をう薬師嚴鑁とて胎蔵
まりの物くるし弥尊い十一面の千手観音
とあり額の文字施善院二字い法師の字
あて寺といふ一字をうるひ古文よ作り俗人の
覺りの作るすうを重きれ見物よ作り法
前よ金漏院をう物ひつけ作りを
法ためは身いをうをとれてを
粉川の水れうをこをを
をう物をし紅葉の間月をあるを

そのかたをやどりとしるべきなん
ありける　山寺の鐘音は海にて
いまだ事あらくとおもひしかくもあれ
紀伊の川をまもりて
水をいる野にさけく紀の川を
なれはてあるあをうる
川をもくむひの川原よりたちて
とりくあつまるを
うちはらひ
きれ川のあれはてにけるかな
鄙にの聲をとゝ
おくはるかなる

ちりそめはしてはけをはしてゆくこと
をしてさらし神ん
いく夢をたゝふるけかきに
いつもの山
はちしのかくとゆくて十八町の坂
十八町をいくのとをあて
伯よ結ぶ
戯し
面けいみつをいくあまつ
結ぶ明るよれ道
ちく面山中おいて面白しく風け

しく面をもりたるに若よりの時多の僧
風呂とかくて沢のあめにはちとゝみ
ふるさとのうつゝ中なる山乃ゝ人の興ゝきとゝ
てあらしゝを

老乃波ゝきとゝてきのさる
十八ゝるゝあめ乃ふ乃身とくゝくれん
からゝして風とこゝやゝしゝ言葉乃はし
山ゝ乃ほゝつゝゝて一ん院乃奥坊といふ
よいゝゝて人をやとゝみめる程郭公れ頻ゝ
ゝきしゝを

高野山佛法僧乃聲とゝゝゝ

世乃事雖とはゝく法をゝ程ゝ僧まゝ
大塔ゝ程ゝゝ中ゝ乃程ゝゝきゝて遠他
けゝ乃中ゝゝ食堂ゝ明ゝ乃ゝゝ
ゝまゝて中ゝゝはゝ三鈷乃松ゝ
ゝ乃ゝ燒てゝゝはゝたゝ地ひゝていゝ
ゝゝゝ中ゝゝとゝゝ

今ゝゝけゝ曉やちゝゝ
ゝゝゝ乃ゝゝおひゝゝ
奥院ゝゝゝ乃道ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐるさとうるひし
海おもやあまの宮ぬきを面しだて
紬のうへくなる事よの山ゐ
沸廟のおれ者しるる惜者の鉢ぬるれ数ゐく
ひとりぬ屋をくをもいくを伝信世たひ
て大師山西指の沿梓水精の沸金球ゐ
頂載せるをを作りを
あふきてをるふいるくを好む
えいろ面紀宮のををを
四より海ゐをををををを
めをて沸ゐる最紙は書付ヰ

凡のを代ゐより沸を乃身をとけて
仏のみちい手にをりつ事ー
あの四をめ別ゐる華勢鬱をてを世作り。
こをかをるをき癒勢あをたくを
作りを。人く鬱紙ゐをる最紙よ
をを玉の我の最乃一をちふ
やをちゐをくをるををてよ
をりをを代をを作ゐたる歯をを
ゐりをを世をる。二八観音乃像ゐををを
遊宝を世作る。服分ー春をくゐり
世ゐまり作をと作をを世をて

いつとなく法を聞き書ひとり
為たてはけふけつてはやく
ゆく河のよろ川とけしにけの
そてい紙為捨てけりはふ
還向乃至枝をたてわくはひとあさ
かすりしの春
寒雪乃消ゆるをしるはや
ゆくをとゝまらんとすれども
廿八日 夕暮の月はれ初るをまて
高野ふこと乃曉れ月をまて
まち明る程久しうけふ

宿坊といひてかきつる事侍り
ちい入一川乃杉をきて
まつらん蓬れ世をいふせん
秋は入る谷の根末乃十梅るをつきて侍り
秋は入る谷の根末乃十梅るをつきて侍り
ものゝ音を岩ほ打ねぬ一夜を
三月をそてめれは乃庭る
廿六日いつもとゝ侍りて
和寺吹を見侍る人侍き
人をゝ屋世くゝ中侍へし又重歌を一首
はゝ侍りまくはゝ歌めりをゝ元をゝ

事にて、まづ侍るかと、数日ありて、紅葉よりひ
侍りかく、筆しぬゆゑなく

部屋なかく紅葉の深山の
あくてさびしと思ふのとうち笑ひ入
さるうへ京の紅葉をしてひれのやとも
小ういに紅葉、やうやうけふたかをめつらふ
かせ、高野源乃紅葉の事、天神乃社へん
まくよりとてく

袖乃うへより紅葉風やあるあれ
たりしけくば乃ふとも事ん

業にまかりて帰りつるきれ

廿七日いとこうちやとも侍りた京仲ら
家小くに一盃ふて侍りき
廿八日ゆ行法院ゆ紅葉ありしうへ帰り
向く大師の山紅乃弁才天ふと、祈見ゆ
くふせちりたる風はよつく夕つるくか
つるかと帰乃ゆ山めりて光明院よ
ふるりしい京願寺より帰りてゆて帰京
乃ゆ紅事ともゆ
いとうしくすむ
廿九日高野参乃前より廿日ゆ
ゆ事ゆりしと、高野義房小くかりゆ

雲さうしあり しらはまとふはりて遊
り 奇霧は野よりひろまりて奥あさうし須

藤宮郭公

いさしいひく船のはたとふ事はつ
はつはいまはのはさやかに聞なる
ほと鵜を
漕ふつりへはの船はつかさ
はつひとつものうつくしく
寄拙本恋
文本ひくく聲はあふる山ひこも
わつらひてすくいとつよや

文月朔日光清といふ者 恵須奥りすつを
り頻より伺ふ 光明院にして一夜あり
しうり

杜丹花

演松のふりやうとし郭公
月の夜 折さうふとれて恋

宗碩

さうしさは光えは月い秋さく

二日 場とそちくすとふはつて
陸神楽 はいつもせるひつを
神を はつ松ふとふ伺ひや

立ちかへりおのが波のたちゆく
天まるふはりていさらんけりの品のし
かて文ちてはつをを待て嘉井のあまて
はおのの歌をたちしむをひあるる
亀井のあはれ此たちをを
あつの会仏をよをたて武庫山お現の法院
こをる。たるれ山竜ひ儀ちより唐
よりわるせる若尊大師ホ方法新をし
ところよりあり眼精微生身よりをくかの
ちし山雲よかをを西行法師の庵をを
をるとりを一をせを地震よりをけり

せめるをあるをあくを待あくををを事を
はなを高をふ縁見して
ちはをせめてををを縁をを
武庫山をををを市ををを
をふくを嘆ををの前をる縁をを待
とををををををふ西をををををを
はをををあるをををを光明院畫の重い
ひををはをけくををををを待ふ
法竜をを縁勢法師を興る人をををる
とををををををを形をはををををを
はを縁。縁因法師の。雲井をみゆる侍弱山

を打ちの中を作り樓門を作りいかもの
ちくいかの所ちり大江殿れあるとて
はいまも松門と称よ見て作る
名ちりそてるられ世の中の人の
大江の門松れ有る人もうな
かりれわちり色ぬる程ちちもりくる
たつもをれ色くは茶色とは
せうも

橋ちらぬりの沼もやよりてを
ちの色ちあるくしよ松をてみさりを
蕾ちあるふはをよ茨川の若狭ちいか而

内裏ちよりておるる日新ちちし小面か
ちていをもり水を撒ちり中りて出新宝
ふまいるくを会通して松ををり
新くおもしをて中れ
屋ちちあるりつをれ
若資直郷新新序

同

す紀ちを書この老住師八ちちよみる
齢を人くをぬるすをやをみりり
事すめる稚しられ打ちをちの
三位の中をくいてをひちよりそ

ゆきうしいてはいかゝ侍いまは浦
の夢もそとれはゆきは雪の若葉
名とはしら雲乃花ふみもとてくとく
所をゆきふとしらくゝ久しく生まきり
ゆるんはゆきは色乃雪はゆきの濃うとも澤
色乃水はうらのかすもむ色もとも
ゆきをうしいうきやふ鶯もみーゆくゝ
明ん

免ゆきを出手とも若葉
ゆきはゆきの行ゝとつてん

国立公文書館
National Archives of Japan